

---

# 幻想女と偏屈男

羽海野涉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想女と偏屈男

### 【Nコード】

N8544T

### 【作者名】

羽海野涉

### 【あらすじ】

桜坂十色は夢見る中学生。いつか王子様が現れる日まで待ち焦がれているけれど、ついに王子様が現れた！

そして滝沢穂は引きこもり。四ヶ月ぶりにアニメイベントで出かけてみたら魔法少女が現れて？

二人が出会うとき、世界が崩壊する。

## 「疾走」「迷走」

四月二十七日、午前七時五分。桜坂十色さくらざかといろ

足を上げて部室を目指す。そこは私にとつての楽園。パラダイス 走れわたし。腕を振れ、足を上げる。そして足を躓いて転んだ先には王子様が私の靴を拾ってくれるのだから。かといって私は故意に転ぶわけも無く、普通に走って普通に部室に到着する一般なる女子ノーマルビープル中学生を演じてしまった。私としたことが。王子様出現までの道のりが少し遠ざかった。

部室である第一音楽室や第二音楽室、音楽準備室の鍵がまだ開いていないので鍵当番の後輩、あたり中ちゃんや柴田ちゃんが来るまでは待たなければいけない。でも実際は顧問の荒川先生が鍵を持っていて荒川先生を待っている中ちゃんと柴田ちゃんをわたしがついているといふ構図になる。だからといってどうにかなることでもない。わたしはちょこんとひんやり冷えた廊下に座った。

ひんやり冷えた廊下というのはスカートとパンツ一枚しかつけていない女の子には冷たく、徐々に体温を奪ってゆく。でもそのひんやりさがいいのだ。寝転びたいくらいに。

そして車が入ってくる音が窓の外から聞こえる。それは間違いない荒川先生の車だ。わたしは二階の窓から見つめた。だがそれと同時に目に入ってくるのは一人の男子生徒だ。

彼こそがわたしの王子様。

彼が久しぶりに学校に来た。

彼に出会うためにわたしは生まれてきた。

わたしは部活を放り、昇降口のほうへ全力疾走した。

全ては、王子様に出会うため。

そもそも、王子様という存在を追い始めたのは小学校五年生くらいからだから四年目くらいだ。その頃から彼氏を作っては違うと思いい、彼氏を作っては違うと思いい。その王子様候補のためなら何でも

した。もう何回もキスは経験しているし、それ以上の経験も何回か有る。けれど彼らは全員違ったのだ。

だけれども彼は違う。絶対王子様なのだ。

白馬に跨り薔薇を口にし血を流しながらもそれはどうでもないぜ、ベイビーという顔をしてその金髪の髪を靡かせ白粉を塗り捲ったかのように白い顔を私に近づかせるのが彼なのだ。というのはあくまで妄想でしかないけれど。

実際は私が落としたハンカチを拾ってくれた、ただそれだけ。

けれど彼は違うのだ。絶対王子様なのだ。

私は走る、彼に求婚するために。

四月二十七日、午前七時十分。

たきざわいなほ  
滝沢穂

灼熱の太陽、燃え上がる空、吹き出る脇汗、滴る水滴！ああもう夏なのか夏じゃないのか、これでもまだ春だつて言うのか、夏じゃないのか気象庁ふざけるな早く訂正しろ何が本日は全国的に春日和でしょうだここは全体的に夏日和じゃねえか、日和ってるんじゃない責任者出て来い！

と、言いたくても実際言う相手も責任者も出てくるわけでもない。はたまた宇宙人なんぞも襲来しないし超能力者も未来人も現れない。現実はまだ単に灼熱の太陽が私の身に降り注ぎアスファルトに降り注いだ熱が足元から体内に侵入、そして脇汗大洪水という炎天下さながらの状態だ。

そういえば、俺が家から出た最後の日はいつだったか。三月は出てないし、二月はもっと閉じこもっていた。一月は家に来る親戚のお年玉を集めて買い物には、そうかアマゾンで済ましてたな、じゃあ最後に行ったのは冬コミか。久しぶりの太陽だ。どうりで、暑いわけだ。

という今日も一月期のアニメ「世界が崩壊する瞬間に時が止まりその少女の瞳が閉じる」のDVD&ブルーレイ発売記念イベントに出席するためだ。今思うと最終十一話はただタイトル通りにヒロイ

ンの生涯が終わるだけで糞だった。けれど買ってしまったものはしょうがない。声優の顔を拝んでこよう。拝めるだけ幸運だ。

というわけで俺は久しぶりの太陽の下、学校の隣を歩いている。少女が少年に走っている。朝から厚いところ見せるなボケ。以上、久しぶりの炎天下滝沢穂なまほーそーでした。プチン。

## 休憩 インターミッション

私は王子様を追いかけた。けれど王子様は、いなくなっていた。俺は会場へと行った。しかし声優ではなく魔法少女と出会った。

四月二十八日、午前八時二分。桜坂十色。

王子様は結局消えてしまった。桜吹雪のように。その後一年二年三年の全クラスを回って見たけど誰もあの人に該当する人間はいなかった。誰も。

もし本当に桜吹雪のように消えてしまった。消失したのだとしたらそれこそ幻想的。ロマンティック

私は昨日の事に思いを馳せて、休日のベットに身を託す。

四月二十八日、午前三時五分、滝沢穂。

「こんにつちはー！やっほー！今日のことならふぁーすとやっほー！」

「黙れ死ね、エセ魔法少女」

俺は何故深夜だというのに、昨日会ったこんな奴とスカイプせねばならぬのだ。

「その想いは君の魂を差し出すに足るものかい？」

「その台詞は魔法少女ではなく白い怪物キユウケネだろ？」

「よく元ネタを知っていたね、褒めてあげる」

よく分からない奴だった。既にキャラ崩壊している。

「おーい、おーい、朝になったら怪物と戦わなきゃいけないからさ

ー。返事頼むよー」

「ちなみにその怪物ってのは？」

「補習の教師」

「イヤに現実的な魔法少女だな！」

「まほーのちからがあればがっこーなんてなくなるのだ、えっへん」

「よーしよし、えらいぞー、病院行って来いなー」

「えへへ、じゃねえよ!」  
キレられた。

「でさー、何であんな場所にいたの?」

「それは、とあるアニメのイベントにさ」

そう言った所で通話が切れた。

「これも機関の陰謀か…」

そして世界は一日前へと戻る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8544t/>

---

幻想女と偏屈男

2011年9月21日03時33分発行